

子育ての社会学：授業での成果報告

ドキュメンテーションを行うまでのプロセスに関する考察

井手 裕子*・佐野 麻由子**

要旨 近年、ドキュメンテーションが子どもの姿を理解するツールとして注目を集めている。しかし、その方法は試行錯誤している状況である。本研究では、2020年度後期の福岡県立大学大学院人間社会学研究科子ども教育専攻の授業「子育ての社会学」の授業で、受講生の一人が企画・運営している自然体験活動にてドキュメンテーションの作成と振り返りを行い、課題や効果について検証した。その結果、ドキュメンテーションにより保育の質の向上が期待できることや、PDCAサイクルの手段としてドキュメンテーションの活用が見込めることが分かった。また、着目するポイントの具体化がドキュメンテーションの質の向上に重要であることも分かった。一方で、時間や手間がかかる、活動目的・記録する視点の明確化をするにあたってファシリテーター的なスキルが必要だという課題も明らかになった。

キーワード ドキュメンテーション、PDCA、保育の質の向上

1. 研究の背景と目的

近年、子どもの姿を捉え理解するツールの一つとしてドキュメンテーションが大きな注目を集めており、取り入れる保育現場が増えている。ドキュメンテーションは、イタリアのレッジョ・エミリア・アプローチに端を発した保育実践である。1991年にニューズウィーク誌に「世界で最も優れた乳幼児教育が行われている

学校」としてディアーナ幼児学校が紹介されたことがきっかけの一つとなり、レッジョ・エミリア・アプローチが世界的な注目を集めるようになった。日本では、レッジョ・エミリア市の実践が2001年にワタリウム美術館で紹介され、注目が高まった。今では保育現場でも一般的に「ドキュメンテーション」という言葉が使用されるようになってきており、ドキュメンテーションを紹介する書籍や論文も多数ある。ド

* 福岡県立大学大学院人間社会学研究科子ども教育専攻修士課程2年

** 福岡県立大学大学院人間社会学研究科・准教授

キュメンテーションとは、「子ども達の日常の学びのプロセスを可視化し、「見える化」するツール」の一つである。ドキュメンテーションを直訳すると、文書、記録であるが、近年の保育分野では、「写真を効果的に用いて、一人ひとりの子どもの姿を描き出し、発信するもの全般」(岩田ら 2018:2)、「ドキュメンテーションとは、子ども達の活動における音声、ビデオ、写真、子ども達の作品、会話・質問・行動の記録メモなどデータを集め、自分たちが集めてきたものについて、友人や同僚、子どもたち、保護者、スクールのコミュニティ、そしてもっとより広い範囲のコミュニティと一緒に考え、共有するプロセス」(山本ら 2018:76) 等と定義されている。

このように日本の保育においてもドキュメンテーションを作成・活用する試みがみられるが、報告事例をみると、ドキュメンテーション自体が目的化していると思われるものも少なくない。ドキュメンテーションは定義にもあるように「手段」であって、それを使用する目的が明確ではない限りその効果は限定的ではないのか。

2. 研究の方法

本稿では、まず、社会科学における記録の基礎的方法を確認し、ドキュメンテーションに必要な過程を確認した。その上で、2020年度後期の福岡県立大学大学院人間社会学研究科子ども教育専攻の授業「子育ての社会学演習」受講者が飯塚市の依頼を受けて企画・運営している自然体験活動を具体例とし、その効果を測定するという場面設定の中で、効果的なドキュメンテーションについて検討することとした。

ドキュメンテーションを実践するにあたり、ドキュメンテーションの対象となる活動を実施する実践者(以下、活動実践者)とそれを記録する者(以下、記録者)とで議論し、ドキュメンテーションの準備・作成・評価を行った。

本稿の執筆は主として井手が担当し、科目担当教員である佐野は構成・内容について学術的な助言を行った。

2.1 質的研究法からみたドキュメンテーションに必要な過程についての仮説

まず、質的研究の第一人者ともいわれるUwe Flick (2011)の質的研究法に依拠して、ドキュメンテーションに必要な過程を整理した。Uwe Flick (2011)は、記録をするにあたっての観察の段階として①セッティングの選択、②観察の際に必ず記録されるべき事項の定義、③観察の焦点を観察者間で統一するための実習、④フィールド全般を把握するための描写的観察、⑤研究に関連した側面に次第に注意を集めていく焦点的観察、⑥意図的に中心的な側面だけを把握しようとする選択的観察を挙げている。

以上より、ドキュメンテーションの本来の目的が、ある事象を把握し記述することにあるとするならば、既存の事例報告には(1)ドキュメンテーションをすることの目的、(2)そこから派生するどのようなポイントで観察し記録するのかという視点の設定が欠如していることが指摘できる。

“(1)ドキュメンテーションをすることの目的”は、目的達成につながる記録をとることである。例えば目的を「子どもの思考(子どもが何を感じ・考え・興味を持ち、どのように活動を広げ深めていったか)のプロセスを捉える」

とするならば、“(2)そこから派生するどのようなポイントで観察し記録するのかという視点の設定”は、「目的（子どもの思考のプロセスを捉える）を達成するためにどのような部分に着目するか・どのように記録するかを明確化する」とすることができる。この目的の場合であれば、どのような部分に着目することで子どもの思考を捉えることができるか（子どもの言葉や行動(見つめる、指さす、触る、観察する等)), 着目した部分をどのように記録したらよいか、大人数での活動の場合は一人ひとりのレベルで細かく見るのは難しいことが想定されるがどのように記録したらよいか、その場にいるだけで参加していないように見えるが、実はその子なりに参加しているような場合、そのような姿をどのように記録したらよいか等といった、記録するポイントの明確化と記録の方法を決めることである。自分が記録をとるという視点で考えた時に、どのような記録をどのような方法で行ったらよいか分からないという課題が出た。この課題を解消するためには、以上の(1)(2)の視点を踏まえ、何に着目しどのような記録を取るかを明確にする必要がある。事前に記録するポイントを明確化する作業を行うことで、活動実践者にとっては、何のためにこの活動を行うのかという目的がより確かなものになり、活動の質や活動者自身の質の向上にも繋がる。記録者にとっては、どこに着目して記録したらよいかの見当がつくことで見るべきポイントの焦点が定まり、次に活かせる記録を取ることがより容易になると考える。

3. ドキュメンテーションを行うにあたっての準備

3.1 明確な目的をもったドキュメンテーションの実施にあたって：活動目的の明確化

ドキュメンテーションは「子ども達の日常の学びのプロセスを可視化し、「見える化」するツールの一つ」(岩田ら 2018:2)である。「見える化」するためには、ドキュメンテーションを行いたい者が何を意図して何を「見える化」するのかを具体化する必要がある。つまり、「見える化」するためには、振り返りに役立つ記録を残すために、活動実践者と記録者との間で意識の摺り合せが必要で、意識の摺り合せをするためには活動目的の明確化と共有が必要となる。

そこで、本授業では、活動実践者と記録者の間でディスカッションを行い、今回の実践の間である自然体験活動では何を目的としているのか、ドキュメンテーションを通して何を見たいのか、見たいものを見るためにどのように記録を行ったらよいか等、活動の目的や記録したいポイントの明確化を行った。

今回、自然体験活動を実践の場として選んだ理由は、受講者の一人が長年飯塚市から委託を受けて企画・運営を行っている自然体験活動が子どもにどのような成長・発達の影響を与えるのか、その効果測定に関心をもっていただいている。

自然体験活動は、「自然との共生」と「人との環づくりと活動実践」を目的とした自然環境事業・環境保全活動を指す。小学生とその保護者が参加し、地域の自然の中で楽しく遊ぶ体験を通して、身近な自然の豊かさや文化的な自然と人の営みを再発見する環境教育的な活動を

行っている。自然体験活動の目的は子どもと大人それぞれに設定されている。まず、活動目的を明確化する作業を行い、子どもの目的として、自然を大切にすることを育む、身近な自然に気づく、関心を持つ、都市部にはない植物・虫を知る、観察して問いを持ち、考えを深める姿勢を育む、“役割”から自己を解放する、こんな事をしてもいいのだ、ということに気づく、の7つが挙げられた。大人の目的は、自然の中で子どもを遊ばせる大切さに気づく、“役割（権力関係、規範）”から自己を解放する、子どもにちゃんとさせないといけないという考えを解き放つ、解放されて遊ぶことの大切さに気づく、の4つである。

3.2 明確な目的をもったドキュメンテーションの実施にあたって：記録する視点の明確化

記録する視点の明確化にあたり、自然体験活動の目的と子どもの成長の姿を摺り合わせて具体化するという目的で、10の姿分析表やルーブリックを参考にして、今回の自然体験活動の目的と記録の視点を項目・段階ごとに整理した。

10の姿分析表を参考にしたところ、活動目的が10の姿のどの部分にあたるのかを把握することができるという効果はあったが、項目が漠然としているため人による捉え方の違いが出るという課題もあった。ルーブリックは、客観的な評価や段階別・項目別の区別が可能となり、10の姿分析表よりも具体的になったという効果はあったが、まだ具体性に欠けるという課題が残った。

これらの考えを参考にしながら記録の視点の明確化の議論を進める中で、これまでの自然体験活動の振り返りの中で、スタッフ間で印象的

な姿を共有し、それを次の活動へ活かしているということが分かった。例えば、はじめは生き物に触れようとしなかった参加者が自ら生き物を探して見つけ、それを周囲に伝えるようになる姿などである。これらの具体例を記録する視点のポイントとして整理したところ、関心をもつ、安心している、親に見せる・話す、コミュニケーションがある、チャレンジする、熱中している、責任ある行動、の7つの視点が挙げられた。

以上を踏まえ、最終的に、活動実践者の目的は「自然に関心をもつきっかけをつくるまで」であることを確認し、目的を大・中・小で分類し、大目標「地域の身近な自然を大切にすることを育む」、中目標「楽しむ、関心を持つ、再発見する」、小目標「触れてみる、観察する、自分で捕まえるようになる、図鑑で調べてみる、スタッフに質問してみる、ワークショップに集中する」とした。今回の活動目的を踏まえて立てた記録する視点のポイントは以下のとおりである。

関心をもつ：じっと見つめる、触ろうとする、
どんぐりの種類を調べようとする

安心している：最初は触らなかったが触ろうとする、親から離れて探索しだす

親に見せる・話す：見つけた植物や虫を見せようとする、どこで見つけた等と教えようとする、楽しかったことや発見したことを伝えようとする

コミュニケーションがある：親や周りの子ども、スタッフと会話する、楽しかったことや発見したことを周りに伝える

チャレンジする：自らも生き物や植物を探そうとする、スタッフの真似をしてどんぐりを磨いてみたり割ったり味わってみる

熱中している：植物や虫を探す、気に入った
 どんぐりを沢山集めようとする
 責任ある行動：植物や虫を大事に扱う

3.3 記録の下準備

活動の目的や記録する視点の話し合いの結果、子どもの言葉や子ども同士・大人とのやりとりに特に着目することになった。写真で子どもの姿を捉えるだけでなく、子どものつぶやきや周りの人との会話も記録する必要がある。今回の活動は野外で行うため、歩きながらメモを取るのには難しいと判断し、デジタルカメラとビデオを使って記録を行うことに決定した。

4. ドキュメンテーションの作成

4.1 自然体験活動の概要

今回ドキュメンテーションを実践したのは、飯塚市自然体験プログラム「いいねん！」である。当日プログラムの内容は以下のとおりである(表1)。

4.2 記録の下準備

活動前日に下見を行って散策ルートの確認や活動の最終的な打ち合わせを行うとのことだったので、記録者も同行した。

前日の下見の際、活動実践者は散策ルートの安全確認、見本となる植物の採取、どこにどのような植物があるかの確認、どのような仕掛けをするかの検討、ビデオを撮って参加者にライブ配信し期待を高める前準備、活動内容や時間配分の確認などを行っており、記録者は、活動実践者と他のスタッフの打ち合わせの様子を見ながら活動の具体的なイメージを膨らませると共に、実際にカメラとビデオを使って記録の練習を行った。機械の動作確認もあるが、どこでどのように記録をするか、自分なりにシミュレーションを行うためである。どこにどのような植物があるということを確認したので、この場所で子どもの反応が見られるかもしれないという予想を立てることができた。記録者は、前日の下見を踏まえて、どの場面の子ども達の反応をより注意して見てみたい、散策ルート上のこの場面で誰が仕掛けに気づくだろうか、等とイメージや予想を膨らませ、特に記録したい場面

表1 「飯塚市自然体験プログラム「いいねん！」の概要」

飯塚市自然体験プログラム「いいねん！」	
実施日時	2020年12月13日(日)
活動内容	午前の部(10~12時) / 飯塚市健康の森公園 「いきものさがし」(自然観察会)
	午後の部(13~15時) / リサイクルプラザエコ工房 「どんぐりを楽しもう！」(パネルシアターで行うどんぐりクイズ) 「どんぐりボックスを作ろう！」(自然体験ワークショップ)
対象者	小学生以上の親子(定員20名程度)
当日の参加者	子ども6名(年中~小4)、保護者6名
参加費	500円(午前のみ参加300円)
スタッフ	3名(自然観察ガイド2名、虫・植物はかせ1名)
サポート	リサイクルプラザエコ工房館長1名、市職員2名、記録撮影担当1名

をいくつかピックアップした。また、この場面ではメモがいいか動画がよいか等、記録方法の検討も行った。

下見では、携帯のカメラやデジタルカメラ、ビデオを使って11本の動画を撮影した。色々な記録ツールを試した結果、午前のプログラムは散策しながらの撮影なので、メモやイラストでの記録は不適切と判断し、記録する道具を絞り、デジタルカメラとビデオのみでの記録に決めた。午後のプログラムは室内で座って行う活動なので全体が撮れるようにビデオを定点設置して撮りっぱなしにして、記録者はメモとデジタルカメラを持ってより一人ひとりの様子を見て回って記録することにした。

4.3 記録の実施

記録をするにあたり、議論や下見を踏まえ「活動を楽しむ」「関心をもつ」ことに特に焦点をあて、それを子どもが集中して見る・聞く・触る・観察する・親に伝える・笑顔になる・驚く・見せるといった状態が見られたときに「活動を楽しむ」「関心をもつ」状態であると想定し、このような姿が見られた時の様子を記録するよう努めた。

記録をする中で、子どもや保護者ばかりに焦点を当てるのではなく、スタッフとの関わりも一緒に記録することでより状況が分かりやすくなると判断し、スタッフの姿も一緒に記録することにした。また、最初はデジタルカメラで写真を撮っていたが、子どものつぶやきの中に子どもが何を感じ考えているのかのヒントが沢山あると感じ、途中から音声も記録できるビデオに切り替えた。予定では写真とビデオ、メモを併用するつもりだったが、活動中にメモをとったり写真やビデオに切り替えたりすることが難

しく、そちらに気を取られて子ども達の様子をしっかりと観察できなかった為、ほぼビデオでの記録である。記録したいと思った時にビデオの電源を入れると間に合わないことが度々あったので、途中からビデオを撮りっぱなしにすることにした。活動終了後は、スタッフで活動の振り返りを10分程度行ったが、ここでは記録した写真や動画は使用せずいつも通りにスタッフの話だけでの振り返りを行った。

4.4 記録の編集

活動は午前の部2時間と午後の部2時間の計4時間あり、記録した写真は17枚、30秒～20分程度のビデオが34本であった。記録したい姿を見逃さないよう、後の記録整理のことは考えずに撮ってしまったため、記録を整理する段階になって悩むことになった。考えた結果、動画を一つ一つ再生しないと内容が分からないのは不便なので、内容が分かるようなタイトルをつけることにした。その作業を行うには動画を全て確認しないといけないため半日ほど時間がかかったが、その後記録を確認するのがスムーズになったので、これは必要な作業であった。

5. ドキュメンテーションの評価

5.1 活動実践者による記録の評価

ドキュメンテーションの実施後、活動実践者と記録者のそれぞれの立場からドキュメンテーションについて評価を行った。活動実践者には、「記録」と「記録の活用」の2つについて評価を行ってもらった。

記録に対する評価では、全体を捉える画像もあるとよかった、ファシリテーターやガイドとしては見えていない参加者の様子（特に観察会

の時) が見ることができてよかったので、観察会の時は前方ガイドと視点を変えて後方のガイドの周りでも記録をとるといいと分かった、タイトルに関しては、プログラムの流れで順を追って把握したい時は、時間軸でのナンバリングなどでもよかった、それに対しての印象的なエピソードやセリフ・誰と誰との会話なのかがわかる一言メモなどを表などに整理したものを作っておくと後々に見返すときに分かりやすいと思った等の4つが挙げられた。

記録の活用に対する評価では、自分たちの活動を客観的にみることができた、その場で見られなかった子ども達の様子を見ることができた、記録されているということがガイドやファシリテーターの意識にもいい影響があった、プログラムの作業などの参加年齢よっての難易度を見るのにもよかった、今後のプログラムに活かせる改善点を見つけられた等の5つが挙げられた。

また、活動の度に今回のような記録と記録を基にした振り返りをするにはできそうかということについては、毎回記録に基づいた活動の振り返りをしようとするのが難しいかもしれないが、まずは記録をとることを習慣にし、当日の振り返りだけでも画像や映像を使うと共有がしやすいと感じた、という意見が得られた。

5.2 記録者による記録の評価

次に、記録者の視点から評価を行う。まず記録のとりやすさについてである。今回は野外活動だったので色々な場所にいる子ども達の様子を歩きながら撮ったのだが、一人では手が回らず撮りきれなかった場面もあった。また、記録するポイントに合わせて記録できていたかというと、記録する際は自分の判断で撮っていた部

分が多くあったため、活動実践者の望んだ記録になっているかという不安が残った。また、活動前に記録するポイントをいくつか出していたが、実際に記録を行ってみると、他にも様々なポイントが出てきた。それらの記録するポイントについては後から付け加え、7つの項目を更に3段階のレベルに分けた形で整理した。例えば、“関心を持つ”の項目で言うと、第1段階は浅い関心、第2段階はやや浅い～やや深い関心、第3段階は深い関心、という具合である(表2)。

次に記録の編集のしやすさについてである。今回の活動で記録した写真は17枚、ビデオは30秒～20分程度のもので34本であった。記録を整理するには、全てのビデオをもう一度見返す必要があり、大変時間がかかった。ビデオの要らない部分はカットしようと考えたが、活動実践者がどのような記録を欲しているのかははっきりと分からなかったため、記録者の視点で勝手に編集してよいのか迷い、結局全ての記録を残すことにした。ビデオデータには内容が分かるようなファイル名を付けたが、その際も、記録者よりの視点でラベリングを行ったため、活動実践者の関心に沿うものになっているか、という不安は残った。

以上のことから、記録者の立場から今回のドキュメンテーションを振り返ってみて、記録をとる際の人手、記録するポイントのより具体的な明確化、記録を編集する負担が大きい、という課題が挙げられた。これらの課題を解決するため、お互いの認識や要望のズレに関してはディスカッションを通して更にすり合わせる必要がある。記録を取る際の人手や記録を編集する負担については、慣れやスキルの向上によってある程度の改善が見込めるが、それでも無視

できない負担が発生すると思われる。ドキュメンテーションを定着させるためには、この労力負担の課題を解決することが必要不可欠である。

6. 考察

6.1 ドキュメンテーションで期待される効果と実施上の課題

本研究では、質的研究法からみたドキュメンテーションに必要な過程や項目について検討したうえで、自然教育の効果をはかる際のドキュメンテーションの実践モデルとして実践を行った。その結果、具体的に目的を定めたことで、活動内容や活動実践者の質の向上が期待できることを確認することができた。活動の目的を明確化することで、何のためにこの活動を行うのかという目的がより確かなものになり、活動の質や活動実践者自身の質の向上にも繋がると思われる。また、活動することと評価できるだけの記録をとるということには大きなギャップがあること、活動目的や記録する視点をかなり具体化しないと記録することは難しいという点も確認できた。他方で、時間と労力の負担が大きいという課題が浮かび上がった。

また、今回の実践の中でも話がドキュメンテーションの方法論へと逸れてしまうことがあったことから、話し合いを的確に進めていく難しさも課題として挙げられる。ドキュメンテーションを行った結果、以下の点が挙げられた。

6.1.1 ドキュメンテーションの実践における効果・気づき・課題

ドキュメンテーションの実践における効果と

して、活動内容や活動実践者の質の向上という点で非常に大きな効果が期待できる、記録を残すことによって活動を第三者的な視点で見直すことが可能になる、の2つが挙げられた。活動目的や記録する視点の明確化を行うことによって、活動実践者も活動目的や重視するポイントの整理ができ、そのことが活動内容や活動実践者の質の向上に繋がる。また、負担の大きさという課題はあるが、活動やPDCAの質の向上という点において、ドキュメンテーションは極めて有効なツールであるといえる。

今回実践を行って得られた気づきは、活動することと評価に使えるような記録をとるということには大きなギャップがあり、活動目的や記録する視点をかなり具体化しないと記録することは難しいということである。事前に記録する視点を摺り合わせたつもりではあったが、活動実践者と記録者との間で見たいポイントのギャップがあることが分かった。記録者として記録をとろうとすると、目的を踏まえた上で何故そこに着目するのかという具体的な理由が必要となる。

課題は、時間と手間がかかる、ファシリテーター的な役割の人もしくはスキルが必要である、の2つである。記録をとるだけでなく、記録を掲示・振り返り・話し合いなど用途によって様々な形で理解・共有・振り返り・評価できる形に編集し整理する必要がある、その作業に時間がかかる。また、話し合いがぶれない様に進行するために考えを整理しながら進めることが重要で、そのようなスキルを持った人が必要である。

6.2 PDCAサイクルでのドキュメンテーションの活用

ドキュメンテーションはPDCAと相性が良いと思われる。なぜかという、PDCAはドキュメンテーションの内容と非常に似ているからである。PDCAとは、Plan（計画）・Do（実行）・Check（評価）・Action（改善）の頭文字を取ったもので、Plan→Do→Check→Actionのサイクルを繰り返し行うことで継続的な業務の改善を促す方法のことをいう。本研究でいうと、以下の通りである（表3）。

ドキュメンテーションでどのような記録をどのように残すかという事を考える際、PDCAでいうCとAの根拠をどのように集めるかというところがポイントになる。CとAに繋げるためにはポイントを押さえた良い記録が必要である。これはドキュメンテーションを行うにあたって下準備で行った内容とほぼ同意である。本研究で、目的の明確化をすることが見る視点の焦点化に繋がり、その結果、とった記録に大きなブレが生じなかったこと、記録をとるにあたって必要な準備がよりの確にできるようになったことが確認された。ドキュメンテーションを行う上で必要な目的の明確化はPDCAの流れに沿うことで可能となることから、PDCAサイクルにおけるドキュメンテーションの検討は有効であるといえる。

以上の過程を通して、ドキュメンテーションを「記録の目的、記録の利用者を明確に定義し、それに基づいて記録する具体的な内容や手段を設定し、記録をもとに評価する一連のPDCAの流れ」に位置付けることができた。ドキュメンテーションをPDCAの流れに位置付けることは、より良い活動や活動実践者の質の向上へと繋げる手助けとなることが期待できるだろ

う。

今回は主にビデオでの記録であったが、文章や写真など、異なる媒体で記録を行った場合の差異などを見ることによって、より効率の良い記録の仕方について検討することができると思われるので、これについては今後検討する必要がある。

参考文献

- 岩田恵子・大豆生田啓友, 2018, 「保育の可視化へのプロセス」『玉川大学学術研究所紀要』(24): 1-13
- 関西大学教育推進部教育開発支援センター, 2016, 『ループリックの使い方ガイド』
- 上田真由美・井手裕子・岸本麻衣子・佐野麻由子, 2021, 「子育ての社会学：授業での成果報告」『福岡県立大学人間社会学部紀要』29(2): 191-202
- Uwe Flick, 2002, 172 『質的研究入門—人間の科学のための方法論』
- 山本理恵・原明子, 2018, 「保育におけるドキュメンテーションに関する研究—レジーナ・エミリア・アプローチにおける観察・記録の方法—」『人間発達学研究』(9): 75-89

表3 「PDCAサイクルとドキュメンテーション」

本研究の場合		
	活動における PDCA	ドキュメンテーション
Plan (計画)	活動の目的を設定する、目的を達成するための活動内容の計画を行う <input type="checkbox"/> 活動目的の明確化はできているか (“3.1 活動目的の明確化”に該当)	明確化した活動内容をもとに記録としておさえるポイントと記録方法を定める <input type="checkbox"/> 記録するポイントの明確化はできているか <input type="checkbox"/> 記録の下準備（記録方法・記録する機材の確認はできているか） (“3.2 記録する視点の明確化”、“3.3, 4.2 記録の下準備”に該当)
Do (実行)	立てた計画に基づいて実行する	活動の中で記録を作成し、編集する <input type="checkbox"/> 記録の実施（記録ツール、手順の確認） <input type="checkbox"/> 記録の編集（使用目的に合わせた記録の残し方や編集の検討ができているか） (“4.3 記録の実施”、“4.4 記録の編集”に該当)
Check (評価)	活動を行う中での活動実践者自身の気づきや作成した記録を基に振り返りを行う <input type="checkbox"/> 活動実践者による活動の評価 (“5.1 活動実践者による記録の評価”に該当)	記録の内容や記録の方法について活動実践者からのフィードバックや記録者自身の振り返りを行う <input type="checkbox"/> 活動実践者による記録の評価（記録の見やすさ、記録するポイントについて評価、記録の活用の評価） <input type="checkbox"/> 記録者の評価（記録する視点にもとづいた記録の評価、記録のしやすさ、記録の編集や整理のしやすさ） (“5.1 実践者による記録の評価”、“5.2 記録者の評価”に該当)
Action (改善)	評価を基に改善点を出し、次回の活動に繋がられるよう改善点に対しての対策を考える	振り返りを基により良い記録の方法を検討する <input type="checkbox"/> ドキュメンテーションで期待される効果と実施上の課題を明確にし、対応策を考える (“6.1 ドキュメンテーションで期待される効果と実施上の課題”、“6.1.1 ドキュメンテーションの実践における効果・気づき・課題”に該当)

